

令和7年度

文部科学省

国際原子力人材育成イニシアティブ事業

未来社会に向けた先進的原子力教育コンソーシアム [ANEC]

「放射線・原子力に関する  
基礎的な実験・実習プログラムの提供」

成果報告書

令和8年3月

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構

## 目 次

1. 事業の概要 .....	1
1.1. 背景 .....	1
1.2. 目的 .....	1
2. 事業計画.....	2
2.1. 全体計画 .....	2
2.2. 令和7年度の計画及び業務の実施方法 .....	2
2.3. 体制 .....	3
3. 令和7年度の成果 .....	4
3.1. マネジメント.....	4
3.2. 実験実習プログラム .....	4
3.3. 実験実習.....	4
4. 結言.....	17

## 1. 事業の概要

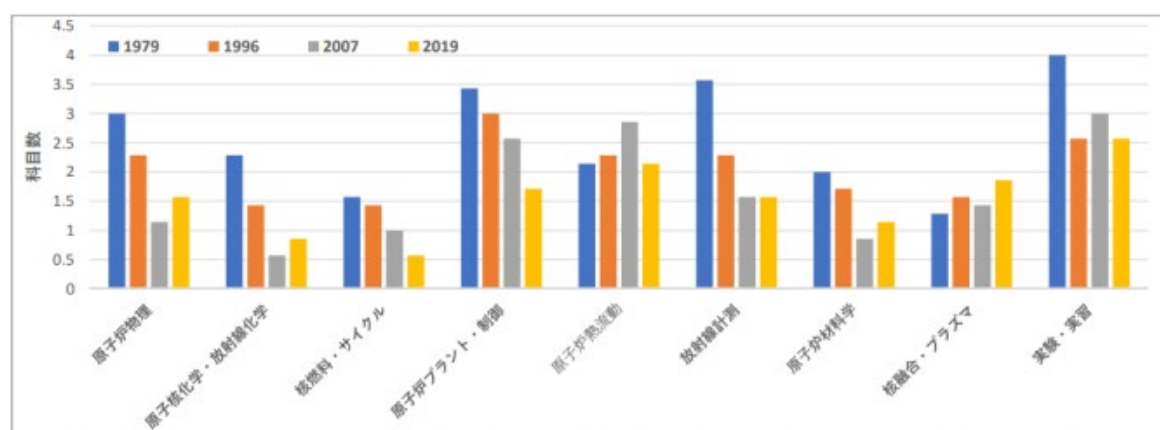
### 1.1 背景

原子力工学の教育では、座学だけでは理解しきれない放射線・原子力の実践的な知識や安全管理のスキルを習得するために、実験・実習は極めて重要である。

しかしながら、国内の大学における原子力関係学科の実験・実習の科目数は、図 1.1-1 に示すように、1979年と2019年を比較すると約4割減少している。

これは、2011年の東京電力福島第一原子力発電所事故が世の中に与えた影響の大きさにより、原子力分野を目指す人材が減少したことや原子力分野を専門とする大学教員の数も減少していることに加えて、大学や原子力研究施設に設けられている研究炉も、福島第一原子力発電所の事故後に設けられた厳しい「新規規制基準」の遵守を求められ、廃炉又はその対応ができるまで稼働停止を余儀なくされたことなど、原子力分野の人材育成を行うためのリソースが減少したことが原因と考えられる。

この減少した原子力関係学科の実験・実習を補うには、大学と研究機関・産業界が連携し、それぞれが有している研究施設・設備を用いた実験・実習を提供することが必要である。



出典：日本原子力学会「原子力コアカリキュラム開発調査報告書」(平成20年3月)(1979年、1996年、2007年のデータ)、文部科学省アンケート(2019年のデータ)

図 1.1-1 原子力関係学科における原子力関係科目数の推移

### 1.2 目的

本事業では、大学で原子力分野を学んでいる学生（大学生、大学院生）のみならず、放射線利用分野や他学部・他学科で学んでいる学生も対象とする。

本事業は、JAEAが有する実験設備や研究炉等の提供により、放射線と原子力の基礎について体感して学習できる機会を与え、放射線と原子力の基礎を理論だけでなく実践的に理解し、研究・開発、放射線管理、原子力施設の運転管理、放射線利用、原子力行政等に応用できる素養を身に付けることができるよう計画する。

したがって、本事業に参加することで、今後の大学での授業等においてより理解度を高め、大学においてしっかりとした基礎知識をベースとした研究等が実施できる人材の育成、また、卒業後においてしっかりとした知識基盤に基づき原子力関連メーカ、原子力関連施設での研究・開発、放射線管理、運転管理、施設管理等に従事できる人材、放射線利用における研究・開発や原子力行政における政策立案等に携わることができる人材の育成を目標とする。

本事業は、放射線・原子力に関して、大学の座学だけでは体験のできない $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線の遮蔽実験、中性子実験、放射線防護具の取扱い、線量及び表面密度の測定、非密封放射性物質の安全な取扱い、研究炉(NSRR)での運転実習等を実施することにより、放射線と原子力への理解を深め、これらで得た知見・経験を基に、原子力関連メーカ、原子力関連施設、原子力行政、放射線利用分野等での就職を希望している学生に対して魅力のある内容とする。

## 2. 事業計画

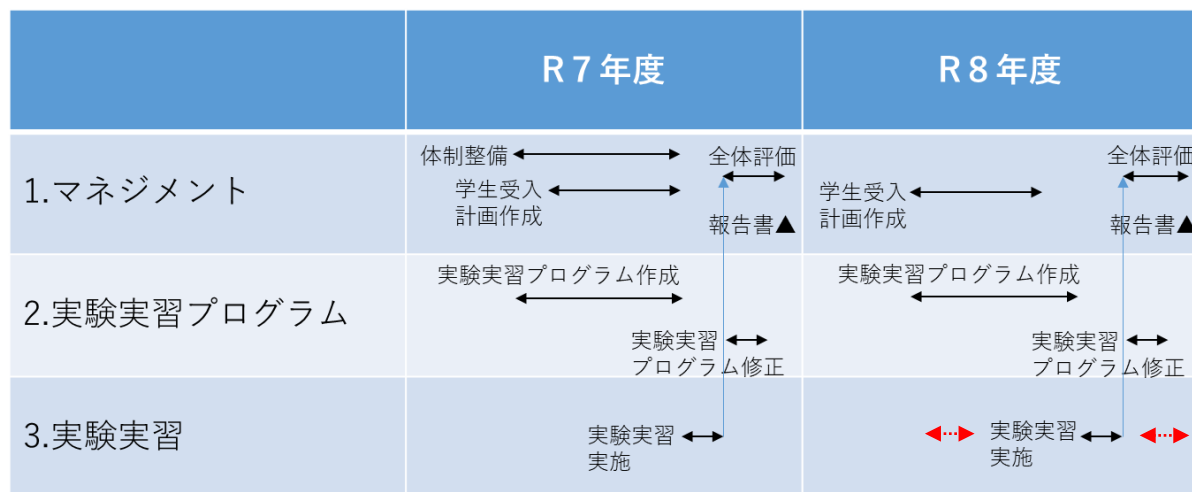
### 2.1 全体計画

原子力人材育成・核不拡散・核セキュリティ総合支援センター（以下「ISCN」という。）では、Co60、Cs137といった密封線源やP32、S35といった非密封RIを取り扱うとともに、それらを安全に取り扱うための施設・設備を有しており、これらの密封線源や非密封RI等を使用して第1種放射線取扱主任者講習（資格講習）や研究炉（NSRR）を用いた原子炉特別実習等の放射線・原子力に関する各種研修を実施している。また、経験豊富で実績のある研修講師を多く有するとともに、研修生の安全教育に関するプログラムが整備されており、本事業を実施するための人材育成資源（人材、設備、実習運営ノウハウ）を十分に所有している。

本事業においては、上記の人材育成資源を活用して放射線・原子力に関する基礎的な実験・実習を実施することにより学生を育成する。具体的には、 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線の遮蔽、中性子実験、線量及び表面密度の測定、 $\gamma$ 線スペクトル測定、放射線防護具の取扱い、非密封放射性物質の安全な取扱い、研究炉(NSRR)運転実習である。

本事業の全体計画図を図2.1-1に示す。

なお、令和8年度の実験実習については、令和7年度の参加状況を踏まえ、実施時期を見直すこととし、2回（令和8年9月、令和9年3月頃を予定）実施することを検討している。



◀...▶ : 実施時期の見直し（検討中）

図 2.1-1 本事業の全体計画

### 2.2 令和7年度の計画及び業務の実施方法

令和7年度は、学生受入計画及び実験実習プログラムを作成し、それらに基づき、実験実習を実施する。実験実習の実施後には参加学生にアンケートを取り、評価を実施し、実験実習

プログラムの修正を図る。また、運営全般に係る評価を実施するとともに、アンケート結果を参考として全体評価を実施し、令和 8 年度の運営の改善に向けた修正を図る。令和 7 年度の計画及び実績を図 2.2-1 に示す。

なお、令和 7 年 12 月に実施した実験実習への参加人数が、当初予定していた人数を満たさなかったため、追加募集を行い、令和 8 年 2 月に実験実習を追加実施した。

項目	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1)①学生受入計画作成						←→	←→		←→	追加実施分		
②全体評価・フィードバック									←→	←→		
③報告書											←→	←→
2)①実験実習プログラム作成						←→	←→		←→	追加実施分		
②実験実習プログラム修正									←→	←→		
3)①実験実習実施									←→	←→	追加実施	←→

←→ : 計画    ←→ : 実績

図 2.2-1 令和 7 年度の計画及び実績

## 2.3 体制

実施体制を図 2.3-1 に示す。

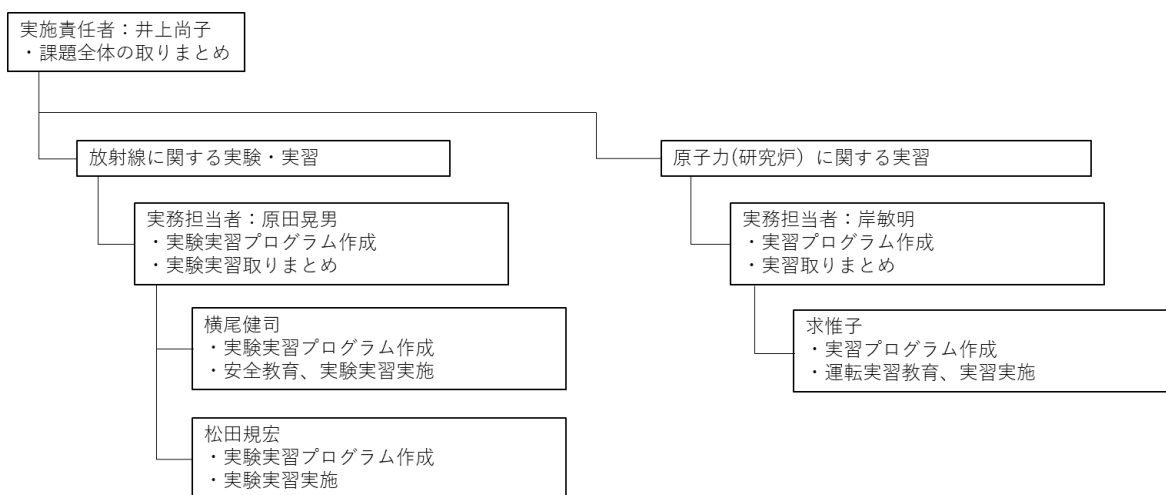


図 2.3-1 令和 7 年度の実施体制

### 3. 令和7年度の成果

#### 3.1 マネジメント

##### ① 学生受入計画作成

学生を受け入れるにあたり、学生を募集するための周知先及び周知方法の検討、学生を受け入れるための諸手続、実験実習期間中の学生の宿泊先調整等の受入計画を作成した。

学生の募集については、ANEC 及び当機構の web サイトでの募集に加え、原子力人材育成ネットワーク、原子力学会学生連絡会、原子力学会インスタグラム、大学連携ネットワーク等を通して募集した。また、人材育成のすそ野拡大のため、原子力以外の学会（土木学会、情報処理学会）や高専等へ広く募集した。

##### ② 全体評価・フィードバック

マネジメント、実験実習プログラム、実験実習等の運営全般に係る評価を実施するとともに、参加した学生のアンケート結果を参考とし、次年度の運営の改善に向けた修正を図った。具体的な修正を以下に示す。

- ・実施時期について、学生が参加しやすい時期である夏休期間中と春休期間中に実施する（合計2回実施）。

- ・初対面の学生同士のぎこちない雰囲気のを和らげ、実験実習しやすい環境を作ることを目的に初日にアイスブレイク等の時間を設ける。

- ・学生の原子力への興味及び知見を広げるために施設見学の時間は必ず確保する。

##### ③ 報告書

全体評価結果、参加学生のアンケート結果、実験実習の成果等を報告書にまとめた。

#### 3.2 実験実習プログラム

##### ① 実験実習プログラム作成

実験実習の時間割の作成、実験実習の担当講師の調整、実験実習のテキスト作成等を行った。

##### ② 実験実習プログラム修正

実験実習を担当した講師の意見や参加した学生のアンケート結果を踏まえ、実験実習の時間割、実験実習のテキスト及び実験実習内容の修正を図った。

具体的には、各実験実習において、時間内に考察する時間を含めて終了できるように進行方法や実施内容を見直すこととする。

#### 3.3 実験実習

##### ① 実験実習実施（全体）

実験実習プログラムに基づき、放射線・原子力に関する基礎的な実験・実習を実施した。具体的には、 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線の遮蔽実験、中性子実験、 $\gamma$ 線スペクトル測定、放射線防護具の取扱い、線量及び表面密度の測定、非密封放射性物質の安全な取扱い、研究炉（NSRR）運転実習等を令和7年12月8日から12月12日にかけて実施した。

なお、上記の実験実習への参加人数が、当初予定していた人数を満たさなかったため、

追加募集を行い、令和8年2月24日から2月27日にかけて実験実習を追加実施した。

追加実施においては、研究炉（NSRR）が定期事業者検査期間中のため、運転実習を実施することができないことから、代替として研究炉（JRR-1）運転シミュレータ実習を実施した。また、学生が参加しやすいよう実施期間を1日短縮したため、非密封放射性物質の安全な取扱いをプログラムから除外した。

追加募集を行った結果、本実験実習に8大学から計24名の学生が参加し、当初予定していた20名を上回ることができた。また、他分野から計14名（全体の約6割）の学生が参加し、当初予定していた10名を上回ることができ、人材育成のすそ野拡大につながったのではないかと考える。実験実習実績を表3.3-1、実験実習内容を表3.3-2に示す。また、参加学生の専攻別内訳を図3.3-1、学年別内訳を図3.3-2に示す。

表 3.3-1 実験実習実績

	項目	実施期間	参加数 (予定数)	他分野参加数 (予定数)
第1回	放射線・原子力に関する基礎的な実験・実習	令和7年 12月8日～ 12月12日	5名 (20名)	2名 (10名)
第2回	放射線・原子力に関する基礎的な実験・実習（追加実施分）	令和8年 2月24日～ 2月27日	19名 <sup>※1</sup> (15名)	12名 (8名)

※1 選考により21名の学生の受入れを予定していたが、一部学生の参加辞退により19名となった。

表 3.3-2 実験実習内容

	項目	実験実習内容
第1回	放射線・原子力に関する基礎的な実験・実習	① $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線の遮蔽 ② 中性子実験 ③ 放射線防護具の取扱い ④ $\gamma$ 線スペクトル測定 ⑤ 線量及び表面密度の測定 ⑥ 非密封放射性物質の安全な取扱い ⑦ 研究炉(NSRR)運転実習
第2回	放射線・原子力に関する基礎的な実験・実習（追加実施分）	① $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線の遮蔽 ② 中性子実験 ③ 放射線防護具の取扱い ④ $\gamma$ 線スペクトル測定 ⑤ 線量及び表面密度の測定 ⑥ 研究炉(JRR-1)運転シミュレータ実習

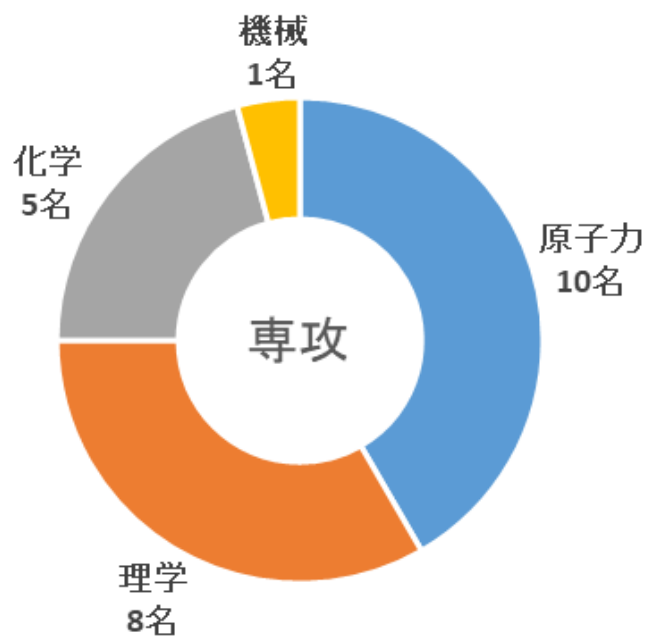


図 3.3-1 参加学生の専攻別内訳

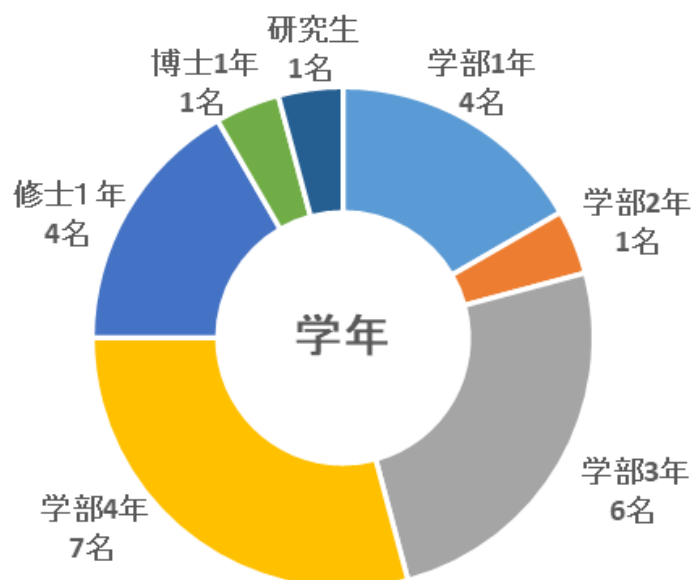


図 3.3-2 参加学生の学年別内訳

## ② 実験実習実施（個別）

### 1) $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線の遮蔽（第1回・第2回実施）

$\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線の特徴について理解するため、それぞれ以下の実験を行った。

- $\alpha$ 線のエネルギーと飛程の関係を理解するため、 $\alpha$ 線用計数装置を用いて、 $\alpha$ 線の空気中での減衰及びPETフィルム、アルミニウム・フイルム、方眼紙などの遮蔽物による減衰を調べた。
- GM計数管を用いて、鉛板、鉄板、アルミニウム板、紙など種々の物質による $\beta$ 線の反射作用を観察した。また、 $\beta$ 線のエネルギーと最大飛程の関係を理解するため、 $\beta$ 線のアルミニウム中における減衰を調べる実験を行った。
- 鉛及び鉄の遮蔽による $\gamma$ 線の減衰を測定し、物質により遮蔽能力が異なることを調べた。また、 $\gamma$ 線の散乱効果を理解するための実験を行った。

実施結果を図3.3-3～図3.3-6に示す。



図 3.3-3  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線遮蔽実験①



図 3.3-4  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線遮蔽実験②



図 3.3-5  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線遮蔽実験③



図 3.3-6  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線遮蔽実験④

### 2) 中性子実験（第1回・第2回実施）

本実験では、中性子の物質内での振る舞いについて理解を深めるため、中性子と原子核との衝突反応による特徴的な現象を実験で確かめた。

具体的には、中性子と原子核との衝突過程で生ずる以下の現象について実験した。

- 中性子の原子核との散乱による減速と拡散
- 中性子の原子核への吸収による物質の放射化等

実施結果を図3.3-7～図3.3-10に示す。



図 3.3-7 中性子実験①



図 3.3-8 中性子実験②

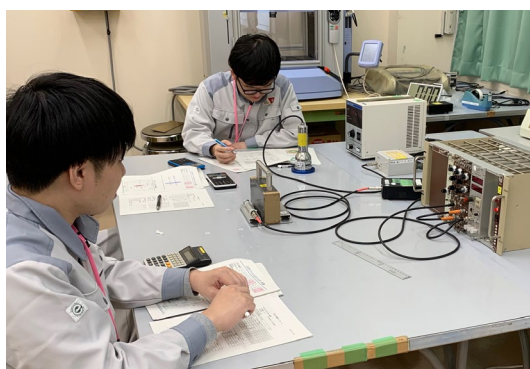


図 3.3-9 中性子実験③



図 3.3-10 中性子実験④

### 3) 放射線防護具の取扱い（第1回・第2回実施）

本実習では、呼吸保護具の種類と特徴、呼吸保護具の防護性能の目安、呼吸保護具の点検保守、身体汚染防護具について座学を行うとともに、放射線防護具の取扱いについて理解を深めるために、実際に身体汚染防護具の着脱、呼吸保護具の（半面・全面マスク）の着脱を体験した。実施結果を図 3.3-11～図 3.3-14 に示す。



図 3.3-11 放射線防護具の取扱い①



図 3.3-12 放射線防護具の取扱い②



図 3.3-13 放射線防護具の取扱い③



図 3.3-14 放射線防護具の取扱い④

#### 4) $\gamma$ 線スペクトル測定 (第1回・第2回実施)

本実験では、環境試料中の放射性核種を定量分析する方法を理解するため、ゲルマニウム(Ge)半導体検出器による $\gamma$ 線スペクトロメーターを使用して、標準線源による $\gamma$ 線エネルギースペクトル測定とスペクトル解析を行った。

実施結果を図 3.3-15～図 3.3-18 に示す。



図 3.3-15  $\gamma$ 線スペクトル測定①



図 3.3-16  $\gamma$ 線スペクトル測定②

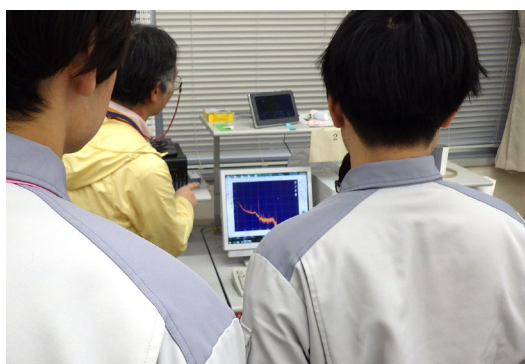


図 3.3-17  $\gamma$ 線スペクトル測定③



図 3.3-18  $\gamma$ 線スペクトル測定④

#### 5) 線量及び表面密度の測定 (第1回・第2回実施)

放射線の量及び放射性同位元素による汚染の状況を適切に測定するには、各種放射線測定器の特性をよく理解した上で測定のための目的、放射線の種類に適した機種を選択して使用することが重要である。本実習では放射線測定器は、電離箱式サーベイ

メータ、GM 計数管式サーベイメータ、NaI (Tl) シンチレーション式サーベイメータを使用した。

本実習において、線量の測定では、サーベイメータの特性を理解することを目的として、サーベイメータの方向特性、1cm 線量当量率の減衰、サーベイメータのエネルギー特性などの測定を行った。表面密度の測定では、サーベイ法による測定を行った。実施結果を図 3.3-19～図 3.3-22 に示す。

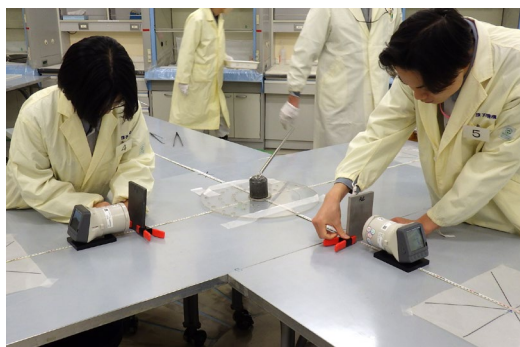


図 3.3-19 線量及び表面密度の測定①



図 3.3-20 線量及び表面密度の測定②

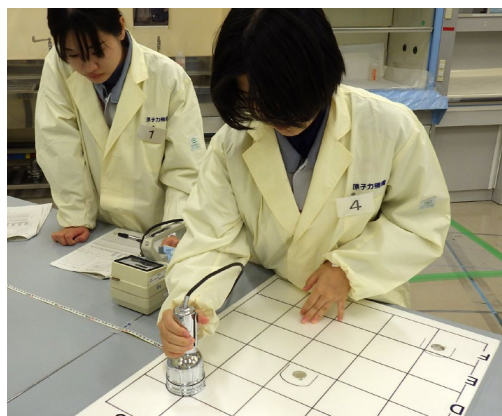


図 3.3-21 線量及び表面密度の測定③

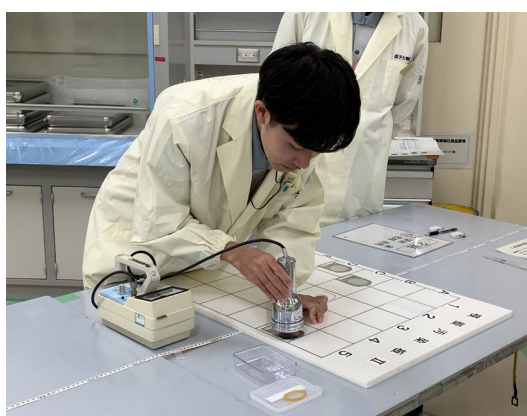


図 3.3-22 線量及び表面密度の測定④

#### 6) 非密封放射性物質の安全な取扱い (第 1 回実施)

本実習では、非密封の放射性物質を取り扱う場合、使用器具類やゴム手袋などは汚染するものとして捉え、汚染の拡大を防ぐために汚染する可能性のある範囲を限定して作業することの大切さを理解させるため、イオン交換分離法による化学分離を通して非密封放射性物質の安全な取扱いを行った。

実施結果を図 3.3-23～図 3.3-26 に示す。

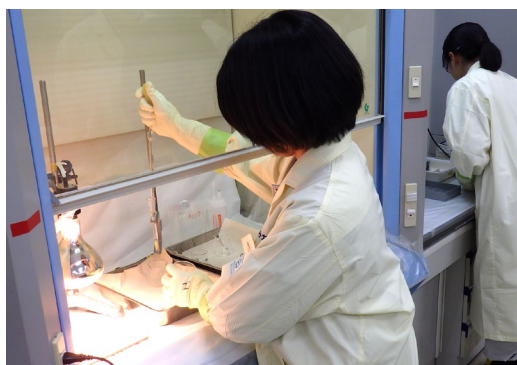


図 3. 3-23 非密封放射性物質の取扱い①

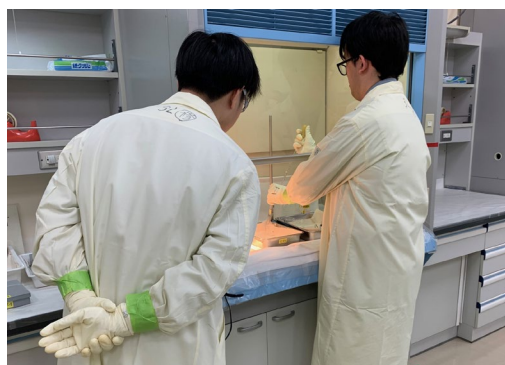


図 3. 3-24 非密封放射性物質の取扱い②



図 3. 3-25 非密封放射性物質の取扱い③



図 3. 3-26 非密封放射性物質の取扱い④

#### 7) 研究炉 (NSRR) 運転実習 (第 1 回実施)

研究炉 (NSRR) を用いた原子炉運転実習では、原子炉において制御棒の引抜き、挿入の操作を行うことで原子炉出力の変化や原子炉の臨界状態を体験した。

また、安全を確保するためにどのような運転管理を行っているかを学んだ。

実施結果を図 3. 3-27～図 3. 3-30 に示す。



図 3. 3-27 研究炉 (NSRR) 運転実習①



図 3. 3-28 研究炉 (NSRR) 運転実習②



図 3.3-29 研究炉 (NSRR) 運転実習③

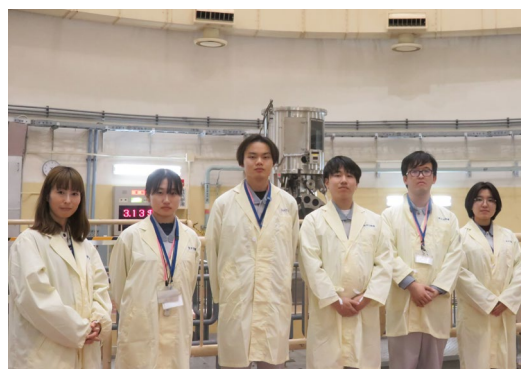


図 3.3-30 研究炉 (NSRR) 運転実習④

8) 研究炉 (JRR-1) 運転シミュレータ実習 (第 2 回実施)

研究炉 (JRR-1) 運転シミュレータを用いた実習では、原子炉において制御棒の引き抜き、挿入の操作を行うことで原子炉出力の変化や原子炉の臨界状態を体験した。

また、研究炉 (JRR-1) 内の展示館を見学し、国内の原子力の歴史を学んだ。

実施結果を図 3.3-31～図 3.3-34 に示す。



図 3.3-31 研究炉 (JRR-1) 実習①



図 3.3-32 研究炉 (JRR-1) 実習②



図 3.3-33 研究炉 (JRR-1) 実習③



図 3.3-34 研究炉 (JRR-1) 実習④

9) ISCN 実習フィールド (核物質防護実習棟) 施設見学 (第 1 回実施)

実験実習を全て終了後、ISCN 実習フィールド (核物質防護実習棟) を施設見学し、核物質防護に関わる機器やシステム等の知見を広めた。

10) 研究炉 (NSRR) 施設見学 (第 2 回実施)

実験実習を全て終了後、研究炉 (NSRR) にて、パルス動画、実験動画を視聴するとともに、制御室、機械棟を施設見学し、原子炉の運転管理、施設管理等の知見を広めた。実施結果を図 3.3-35～図 3.3-38 に示す。

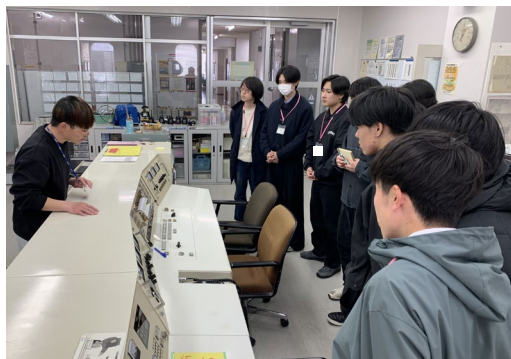


図 3.3-35 研究炉 (NSRR) 施設見学①



図 3.3-36 研究炉 (NSRR) 施設見学②



図 3.3-37 研究炉 (NSRR) 施設見学③



図 3.3-38 研究炉 (NSRR) 施設見学④

11) 意見交換会 (第 1 回・第 2 回実施)

実験実習の感想や今後の実験実習の改善に向けて、参加学生と講師、事務局との意見交換会を実施し、自由闊達な意見交換を行った。

実施結果を図 3.3-39～図 3.3-42 に示す。



図 3.3-39 意見交換会① (第 1 回)



図 3.3-40 意見交換会② (第 1 回)



図 3.3-41 意見交換会③（第2回）



図 3.3-42 意見交換会④（第2回）

### ③ アンケート調査結果

本実験実習の有効性確認と次年度の実験実習の改善を図ることを目的に、参加した学生にアンケート調査を実施した。

本実験実習に参加した24名に対して、「大変満足」、「満足」、「不満足」、「実験実習の意図と異なる」の4段階で満足度のアンケート調査を実施した結果、全員の学生が「満足」以上と回答した。アンケート結果を図3.3-43に示す。

また、「非常に役立つ」、「役立つ」、「あまり役立たない」、「ほとんど役立たない」の4段階で有効度（現在及び将来の勉学・研究・職務にとって、どの程度役立つか）のアンケート調査を実施した結果、全員の学生が「役立つ」以上と回答した。アンケート結果を図3.3-44に示す。

併せて、「原子力関連企業」、「電力会社関係」、「原子力研究機関」、「官公庁」、「大学等教育機関」、「その他」の分類で希望進路のアンケート調査（複数回答可）を実施した結果、原子力関連企業（31%）が最も多く、次に電力会社関係（26%）が多いことを確認した。原子力関連（原子力関連企業、原子力研究機関）に希望している学生に注目すると合計46%であった。アンケート結果を図3.3-45に示す。

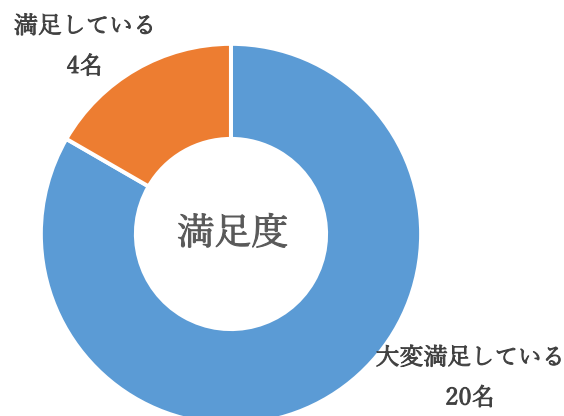


図 3.3-43 アンケート結果（満足度）

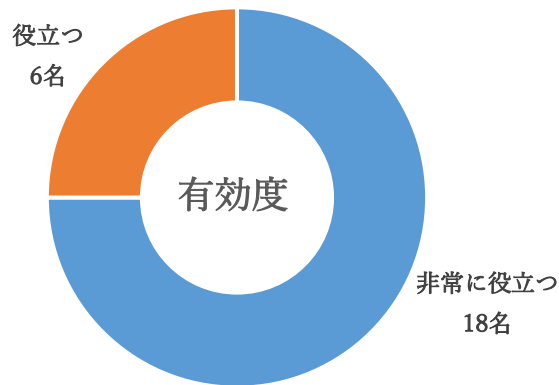


図 3.3-44 アンケート結果（有効度）

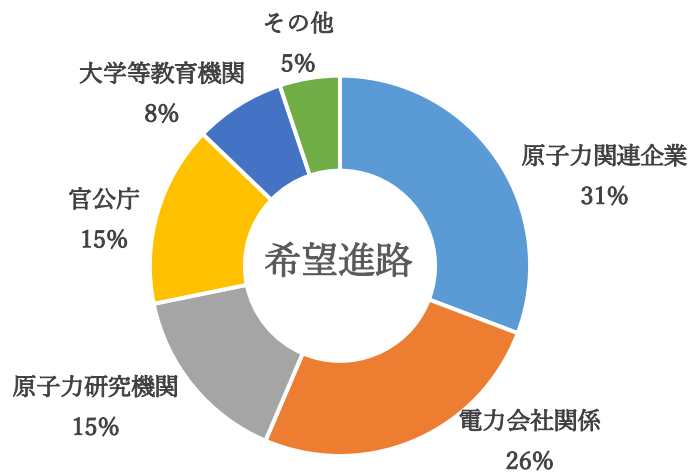


図 3.3-45 アンケート結果（希望進路）

次に学生からの主な意見について以下に示す。

- 原子力について初心者の私でも分かる内容で良かったと思います。
- $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線の遮蔽は、計測や数値、定数にどのような意味があるのかを考えることができて良かった。
- $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 線の遮蔽は、座学がとても分かりやすかったため、実験結果を論理的に捉えることができた。
- 中性子実験について、中性子を減速させる実験を行う機会はほとんどないため、貴重な経験をすることができた。
- 放射線防護服の取扱い方を学ぶことによって、汚染を広げないための方法を学べたのが良かった。

- ・放射線防護具の取扱いは、大学では絶対に体験することはできない内容でかつ、実際に様々な装備を着用して作業の難しさ、着脱の難しさ、マスクによる防護の度合い等を体験することができて楽しかった。
- ・線量及び表面密度の測定は、実際に手を動かし体感することでより深い理解となった。
- ・線量及び表面密度の測定は、管理区域で実際に線量を測定したり、遮蔽したり、出入りの一連の動きを体験できて良かった。
- ・非密封放射性物質の安全な取扱いでは、普段使えない器具、実験ができたことが良かった。
- ・非密封の放射性物質を普段使うことがなかったので、使うことができて良かった。
- ・研究炉（NSRR）の運転実習で、原子炉の運転及び単一パルスでのチェレンコフ光を見ることができて良かった。
- ・研究炉（NSRR）の運転実習は、チェレンコフ光が見られるほど炉出力を上げて運転をさせてもらうことがないため、特におもしろかったです。
- ・研究炉（JRR-1）運転シミュレータ実習では、普段触れられない原子炉の制御を模擬体験でき、歴史を学ぶだけでなく自分で動かす実習を通して、原子力についての理解が深まりました。
- ・講師が1グループに1人以上ついてくれたので、わからないことをすぐに質問できて、とてもやりやすかったです。
- ・他分野の人も対象としており、基礎づくりでしたが、原子力に関りが無い私にもわかりやすく、あっという間でした。
- ・講義内容は分かりやすく、実際に実験を通しながら学ぶことができ、知識がより身に付きました。
- ・いろいろな大学の方と交流できたのが非常に良かったです。
- ・見学が楽しかった。

一方、今後改善が必要という意見について以下に示す。

- ・12月の開催について、開催時期がもう少し早いと良かったと思った。
- ・考察する時間がもう少しあると良いと思いました。
- ・考察をグループの人や講師の方々と話し合いたいと思いました。
- ・時間内に終わらない実習がいくつかあった。
- ・JAEAの沢山の施設を見学したい。
- ・初日にアイスブレイクの時間があると良いと思いました。
- ・班メンバーを固定化するのではなく、毎回シャッフルしたほうが、多くの学生と交流できると思いました。
- ・実際にどのようなシーンで使っているとかどういう意味があるとかを詳しく説明してほしいかった。

#### ④ 評価

参加した学生のアンケート結果等を参考にマネジメント、実験実習プログラム、実験実習等の運営全般に係る評価を実施した。評価結果を以下に示す。

- ・他分野から全体の約 6 割を占める学生が参加したことから、本事業は人材育成のすそ野拡大に有効であったと考える。
- ・アンケート結果から、高い満足度及び有効度を確認できたことから、他分野で学んでいる学生を含め、実験実習を通して、本事業の目的である放射線と原子力の基礎について実践的に理解できたのではないかと考える。
- ・実施時期について、学生が参加しやすい時期である夏休期間中と春休期間中に実施することで検討する。
- ・初対面の学生同士のぎこちない雰囲気のを和らげ、実験実習しやすい環境を作ることを目的に初日にアイスブレイク等の時間を設けることとする。
- ・今回の実験実習プログラムにおいて、試験的に施設見学を設けたが、アンケートの結果、施設見学を要望する学生が多かったことから、学生の原子力への興味及び知見を広げるために施設見学の時間は必ず確保することとする。
- ・各実験実習において、時間内に考察する時間を含めて終了できるように進行方法や実施内容を見直すこととする。

以上の改善点については、次年度に修正を図ることとする。

#### 4. 結言

本事業は、令和 7 年度国際原子力人材育成イニシアティブ事業で新規採択され、初めての開催であった。令和 7 年 9 月から事業を開始し、12 月に実験実習実施としたため、募集期間が短かったこと、初年度で認知度が低かったこと、後期授業期間中であり学生が参加しづらい等により、当初予定していた参加人数を満たさなかった。このため、追加募集を行い、令和 8 年 2 月に実験実習を追加実施した。この結果、合計で当初予定していた参加人数を上回ることができたとともに、他分野から参加した学生は、原子力分野を上回る人数であった。この結果については、すそ野拡大のため、広く学生を募集したこともあるが、アンケートにより応募理由を確認したところ、「実験実習内容」を理由としている学生が最も多かったことから、放射線・原子力に興味関心を持っている学生に共鳴できたのではないかと考える。

また、実験実習に参加した学生のアンケートの結果、全員が「大変満足」または「満足」と回答しており、原子力分野/他分野を問わず、満足度の高い実験実習を提供することができたと考える。一方、マネジメント、実験実習プログラム等に関する改善点も確認できたことから、次年度の実験実習に反映させていくこととする。

令和 8 年度においても、人材育成のすそ野拡大を図れるよう、広く募集をかけるとともに、満足度の高い実験実習を目指して、実験実習プログラム、実験実習内容等の充実化を図っていくこととする。

以 上